

〔研究論文〕

『大乘莊嚴經論』における資糧 (*saṃbhāra*) の概念
—注釈書にみる概念理解の変遷—

岸 清香

〔Article〕

**Remarks on the *Sam̐bhāra* of the *Mahāyānasūtrālaṃkārabhāṣya*
—Consideration on the Understanding Seen in Commentaries—**

Sayaka KISHI

Abstract

Sūtrālaṃkāravṛttibhāṣya (=SAVBh) attributed Sthiramati is one of commentaries of the *Mahāyānasūtrālaṃkārabhāṣya* (=MSABh). Canonical citations came to be seen in the SAVBh (=textbook for Bodhisattva in Yogācāra school). SAVBh and other commentaries of the Yogācāra treatises may be attributed Sthiramati, but interpretation with canonical citations is unique to SAVBh. In general, almost commentaries of Buddhist treatises have feature of author's opinion with explanations on technical terms. However, there are several canonical citations from *Akṣayamatīrdeśasūtra* (=Akṣ) and *Kāśyapaparivartakasūtra* (=KP) in the Chapter 18th of the SAVBh. Sthiramati only refers to two accumulations of bodhisattvas (*saṃbhāra*) with canonical citations from *Kāśyapaparivartakasūtra* in the Chapter 18th of the SAVBh. In this article, two accumulations of bodhisattvas (= *saṃbhāra*) with canonical citations from *Kāśyapaparivartakasūtra* will be discussed.

According to analyzing of commentary on the 資糧 (*saṃbhāra*) in the SAVBh, the canonical citations from the KP emphasize that two accumulations of bodhisattvas is superior to that of Śrāvakas. Moreover, according to the *Kāśyapaparivartakasūtraṭīkā* (=KPṭ) attributed Sthiramati, Bodhisattvas lead unlearned bodhisattvas such like parents who give fresh butter them to enlightenment. Yogācāra treatises (i.e. *Yogācārabhūmi* (=YBh) and so on) also refer to a simile of fresh butter. We understand the simile of the fresh butter explain great feature of completed bodhisattvas for unlearned bodhisattvas in terms of educational tradition in Yogācāra school. On the basis of the KPṭ and YBh, in conclusion, we should understand two accumulaitons of bodhisattvas of the SAVBh.

1. 本稿の研究背景

大乘仏教の起源は、およそ紀元前後に遡るとされており、それ以前に成立していた仏教とは一線を画するものである。教団組織の巨大化や集団化に伴い、それ以前の仏教にはなかった在家信者への救済措置が数多くとられた点は、仏教内部における変革であったといえる。

具体的には、自利利他を追求する菩薩の存在、無数に存在する仏やその教えを集約した新たな

大乘經典の編纂などがあげられる。特に大乘經典は、従来存在した釈尊(仏教における最初の仏＝ブツダ)の言葉を集約した阿含經典類と異なり、あまた存在する仏の教えが展開されている。

空の思想を中心に説く『般若經』の典籍類をはじめ、阿含經典類にはなかった教義の理論面の強調などがみられる。とりわけ、『法華經』等は在家信者に対して仏教への帰依を強調するなど教義や修行よりも信仰の重要性が論じられる箇所が散見される。同時に、在家信者への信仰とともに、大乘の名の下に自利利他を追求する出家者に対する修行方法にも変遷がみられる。以前の仏教において存在しなかった新たな修行方法や徳目が特に重視されるようになり、いわゆる衆生を救済する菩薩のための修行階梯＝菩薩道の重要性と明確化が大乘經典において促進されたとみられる。

さらに、複数の大乘經典によって大乘仏教の教義が広まるとともに、膨大な注釈書が作成されるようになった。当時のインドにおいて、大乘仏教はそれ以前の仏教から派生したマイノリティであったため、積極的な論(＝解説書)の作成を通じて出家者の育成が図られていたと推測される。論の作成が進行し時代を経るとさらに複註が作成され、大乘經典の優位性の強調が図られた。特に、空の思想を論じる中観学派とヨガの実修と唯識思想を論じる瑜伽行唯識学派の二大学派が隆盛を誇ったことが残存する注釈文献資料などが知られるところである。

大乘經典に対する注釈書であるから、論および論の複註の内容は基本的に大乘經典を支持し、その正当性については問わないものである。注釈者によっては、自身の見解に対して大乘經典を引用し、その説の有用性を強調するものもある。しかし、瑜伽行唯識学派の一大学師として知られるスティラマティ(＝安慧)の著した注釈書の一つである『莊嚴經論釈』¹は、『大乘莊嚴經論』¹の註釈書であり、逐語的な註釈として知られている²。

スティラマティの注釈スタイルは、その注釈対象である論の特性などによって異なるが、瑜伽行唯識学派の典籍に数えられる『大乘莊嚴經論』や『中辺分別論』といった論に対する複註は、初学者の便宜を図ったものに見受けられる。

ただし大乘經典の構成上、菩薩のための修行階梯の詳細のうちには、大乘仏教成立以前の阿羅漢(＝自らに修行を行い、自身のみが解脱に到達する出家者)と共通する修行方法や徳目が散見される。修行方法が共通するという点から、阿羅漢と菩薩の明確な差異化は、大乘經典の文言のみでは困難であったとみられ、注釈者たちにとってもいかに大乘仏教の優位性を強調するかは憂慮された点であるといえよう。その中で、瑜伽行唯識学派に属するスティラマティの注釈書研究の進展に伴い、この大乘仏教の優位性を強調する手段として、特定の大乘經典の引用が着目されるのではないかという発想に至った。

1 『大乘莊嚴經論』は、偈頌のみのものと偈頌に散文註を付したものがある。本稿では便宜上ヴァスバンドゥに帰せられる散文註を付した Mahāyānasūtrākamkārahāsyā を『大乘莊嚴經論』と表示する。成立年代は、およそ5世紀頃と考えられる。

2 『大乘莊嚴經論』の註釈にはスティラマティのものだけでなく、アスヴァパーヴァ作のもの等があるが、本稿ではおよそ100年経過してのち成立した『莊嚴經論釈』に絞り、その註釈から知られる『大乘莊嚴經論』の特質を検討するものである。作者とされるスティラマティには『三十偈釈』といった他の瑜伽行唯識学派思想の論書に対する註釈も存在するが、他の論書註釈との比較は稿を改めて論じたい。

2. 本稿の目的

『莊嚴經論釈』の註釈の特徴の一つとして、大乘經典からの文言を多数引用する点があげられる³。その中でも『大乘莊嚴經論』第十八章「菩提分品」(=菩薩の修行階梯における初期段階を記した章)全体を通じ、經典からの文言が引用される回数は多章に比して群を抜いている。

特に、『大乘莊嚴經論』で論じられる徳目の中でも、中心テーマである三十七菩提分法(=37に数えられる初学者の代表的な修行方法)の解説に際して大乘經典からの文言の引用量が多いことで知られる。管見の限りで、經典からの引用は、ほぼ『大方大集經』「無尽意品」からと確認されるが、『大乘莊嚴經論』第十八章で論じられる二十二の修行徳目のうち、『莊嚴經論釈』では資糧(sambhāra)の徳目に対してのみ、『大宝積經』から引用がみられる⁴。本稿は、この『大宝積經』からの引用箇所注目し、スティラマティの註釈の意図を引用元である大乘經典の記述を踏まえて検討し、いかに大乘經典の優位性を従来からの修行方法の解説を通じて行ったかについて検証するものである⁵。

-
- 3 詳細は岡田・岸[2008]pp.61-pp.103を参照していただきたい。すでにBraarvig[1993]にも『大方大集經』「無尽意品」から多数の文言が引用されていることが知られる。Braarvigは、『大方大集經』「無尽意品」からの引用回数の多さからこの註釈である『大方大集經註』の作者をスティラマティに帰せられるのではないかと論じている。しかしながら、コロフォンよりヴァスバンドゥ作と示される『大方大集經註』を引用数の多さのみでスティラマティ作と断定するのは早急であるといえよう。
- 4 『莊嚴經論釈』では、以下の図に示す通り、章全体にわたって『大方大集經』「無尽意品」からの文言の引用が散見される。このように『大方大集經』「無尽意品」からの引用を数多く採用する形式の章は『莊嚴經論釈』第十五章・第十六章にもみられるものだが、本稿では第十八章に限って論じることとする。
- 5 Braarvig[1993]等の研究成果により、『莊嚴經論釈』第十八章と『大方大集經』「無尽意品」の関係性が深いことは知られるが、今回の発表のように少数の引用についても十分に吟味されるべきであるというのが本発表の意図である。

3. 『莊嚴經論積』における引用箇所と『大宝積經』引用の特殊性

まず、『莊嚴經論積』に見られる各徳目と、大乘經典からの引用の対応については以下の通りである。

<『大乘莊嚴經論』第十八章と『大方大集經』「無尽意品」の対応関係>

『大乘莊嚴經論』第十八章

『大方大集經』「無尽意品」

1. 羞恥	
2. 堅持	
3. 不退	
4. 知論	
5. 知世間	
6. 四依	四無礙
7. 四無礙	四依
8. 資糧	資糧(助道功德・助道智慧)
9. 四念処	四念処
10. 四正勤	四正勤
11. 四神足	四神足
12. 五根	五根
13. 五力	五力
14. 七覚支	七覚支
15. 八正道	八正道
16. 止観	定慧(止観)
17. 方便	
18. 陀羅尼	総持・弁才
19. 願	
20. 三三昧	
21. 四法印	四法印
22. 刹那滅・人無我	一道 修方便 八十無尽法 囑累

上述の通り、『大乘莊嚴經論』第十八章を構成する徳目と『大方大集經』「無尽意品」を構成する徳目は共通している点が多い⁶。1.～5.にあげた羞恥から知世間までの徳目は、『大方大集經』「無尽意品」にみられない。『大方大集經』「無尽意品」で四無礙以前には、六波羅蜜(=菩薩が到達すべき智慧のための実修)と四無量心(=菩薩に必要な慈・悲・喜・捨の境地)が論じられているが、六波羅

6 図1については高崎[2009:156]より改変。項目の対応についてはすでに一定の共通性があることが知られてきた。しかしながら、その内容分析までは十分になされていないのが現状である。

蜜や四無量心といった徳目は、『大乘莊嚴經論』第十六・第十七章でも論じられており、『大方大集経』「無尽意品」と『大乘莊嚴經論』の章構成および徳目が一定の対応関係にあることが知られる⁷。

さらに、『莊嚴經論釈』において、各徳目の解説にスティラマティは『大方大集経』「無尽意品」の文言を多数引用するが、『大方大集経』「無尽意品」の文言を引用される徳目は、対応関係上で線に囲まれた徳目に限られ、すべての徳目を網羅するわけではない。『大方大集経』「無尽意品」からの引用がみられない徳目には、1. 徳目が『大方大集経』「無尽意品」と対応があるものの引用されないケースと、2. 徳目の対応があるものの別の経典の文言を引用するケースと、3. そもそも徳目自体が対応しないケースがある。

1. のケースが四神足の徳目⁸、2. のケースが資糧(=菩薩が積むべき美德)の徳目⁹、3. のケースが羞恥から知世間までの徳目等である。このうち、資糧の徳目については¹⁰、『大宝積経』から文言が引用されており、『莊嚴經論釈』の中でも特異な箇所といえる。本稿ではこの『大宝積経』の文言を引用する箇所に着目し、その理由を検討したいものとする。

4. 『大宝積経』テキストとの比較検討

最初に、『莊嚴經論釈』にて『大宝積経』から文言の引用が登場する当該箇所を以下に示す。

byang chub sems dpa'i tshogs dag ni // mi mnyam bsod nams ye shes so // (18-38ab) zhes bya ba'i tshigs su bcad pa gcig gis tshogs gang yin pa dang / gang gi phyir tshogs su gyur pa de ston te / de la byang chub sems dpa'i tshogs ni nram pa gnyis te / bsod (D.4) nams kyi tshogs dang ye shes kyi tshogs so // byang chub sems dpa'i bsod nams dang ye shes kyi tshogs ni bdag dang sems can thams cad kyi don du bsags pas ni nyan thos la sogs pa'i tshogs las 'phags pa'i phyir mi mnyam pa zhes bya'o // de bas na

-
- 7 能仁正頭他編 [2013] によって、第十七章と第十八章と項目構成の上で関係性が論じられている。第十五章以下の『大乘莊嚴經論』の章構成というは一連の関係性があるとみるべきと長尾 [2009: 3] にも指摘されているところもある。『莊嚴經論釈』では『大乘莊嚴經論』第15章の冒頭は第14章に付す流れとなっており、主題の転換といった提起もなされている。
- 8 四神足の分析に対して、『莊嚴經論釈』では経典からの引用は見られない。他の三十七菩提分法の解説とは異なる部分であるが、アスヴァパーヴァの著した『大乘莊嚴經論註』では四神足の分析に対して註釈自体存在しないことを考えれば、詳細な解説は必要性がないと判断されていた箇所であった可能性も示唆される。
- 9 『莊嚴經論釈』には『大方大集経』「無尽意品」からの文言が引用されることはないが、『大方大集経』「無尽意品」の資糧の解説を引用するものに『学処集成』(= Sikṣāsamuccaya)がある。高崎 [2006] や Braarvig [1993: Iv] で指摘されているが、正確に言えば ŚS [1977: 191-192] で dharmasambhāra を説明する際に引用されている。dharmasambhāra を集積した者にとって智資糧がやってくるとして、引用箇所は智資糧の箇所のみである。『学処集成』においても、どうして『大方大集経』「無尽意品」から文言を引用するかは指摘されていないが、dharmasambhāra が智資糧を積む前段階であると考えれば、以下註10に示した通り、智資糧を積む原因や条件 = dharmasambhāra として経典の文言との整合性もとれると考えられる。
- 10 資糧については、実際に『大方大集経』「無尽意品」に不滅なるものとして資糧の解説が含まれている。Braarvig [1993: 457-479] によれば、福德資糧と智資糧の各々について解説するが、『大方大集経』「無尽意品」では福德資糧についてはその資糧が布施といった善行を本質とするものであるといった福德資糧そのものが何であるかが論じられている。他方、智資糧の解説では、どのような原因や条件によって智資糧が積まれることになるのかと、その原因や条件を列挙するのみである。これは『莊嚴經論釈』で声聞・独覚より優れた資糧とは何かと結果誰のために資糧積むのかという『大乘莊嚴經論』の偈頌の解説に対応しないため、『大方大集経』「無尽意品」からの文言の引用が避けられた一因なのではと考えられる。

dkon mchog brtsegs pa'i mdo las kyang / (D.5) byang chub sems dpa' nams kyi ye shes kyi tshogs ni phyogs bcu'i nam mkha' lta bur blta'o // nyan thos nams kyi ye shes kyi tshogs ni yungs 'bru srin bus zos pa'i nang gi nam mkha'i khyon tsam du blta'o // byang chub sems dpa'i bsod nams kyi tshogs ni phyogs bzhi'i (D.6) rgya mtsho'i chu lta bur blta'o // nyan thos kyi bsod nams kyi tshogs ni ba'i rmig rjes kyi (D.: ba'i rmig rjes kyi chu lta bur blta'o zhes gsungs so // 'dis ni tshogs gang yin pa bstan to // (SAVBh D. Tsi 101a3-6)

「諸菩薩たちにとって、福德と智慧の二資糧というのは[声聞・独覚]より優れている。」という一偈によって、「資糧とは何か」と「誰のために資糧となるのか」が説かれた。そのうちで、菩薩の資糧は二種ある。福德の資糧と智慧の資糧である。菩薩にとっての福德と智慧の資糧は、自己と一切衆生のために集められるものだから、声聞等の資糧より優れているために、等しくないとされる。従って『大宝積経』からも、「諸菩薩の智慧の資糧は、十方に[広がる]虚空のごとくと知られるべきである。諸声聞の智慧の資糧は、芥子粒が虫によって食われた内側のわずかな虚空のごとくと知られるべきである。諸菩薩の福德の資糧は、四方の大海の水のごとくと知られるべきである。声聞の福德の資糧は、毛髪先端の水滴のごとくと知られるべきである、と述べられている。これによって、資糧とは何かの説かれた。

『莊嚴經論釈』の中で『大宝積経』に經典名を挙げているため、出典元は明確である。出典元を明記するケースは散見される程度であり、「菩提分品」中では『大宝積経』と明示されるのは当該箇所のみである。ただし、『莊嚴經論釈』にはこれ以上の言及は見られず、『大宝積経』を引用する意図については言及されていない。ただし、『大方大集経』「無尽意品」から引用された文言に対しても、經典引用の理由が『莊嚴經論釈』内にほぼ見られないことを踏まえれば、經典の文言は論じられた徳目に対する根拠として引用されているにすぎないと考えることも可能である。つまり、この複註で意図する声聞・独覚より優れている菩薩の資糧が、『大宝積経』によって根拠づけられるのみである。福德の資糧については、声聞のそれは毛髪先端の水滴のごとくであり、菩薩のそれは四方の大海の水のごとくである。他方智慧の資糧については、声聞のそれは虫に食われた芥子粒のわずかな空間のごとくであり、菩薩のものは十方に広がる虚空のごとくであるという。いずれの資糧も、その大きさの差異を比喻にて指摘するものである。

では、実際に引用されている『大宝積経』の文言は、いかなるものであろうか。その文言は、以下の通りである。

<§76>...(missing)...<§77>...(missing).....vālam
uccharet kuśalānvitam śrāvakam eva paśyatha kuśalena yuktam abhisamskṛtena / <§78> tad
yathāpi nāma kāśyapa ghuṇakhādītasya sarśapam abhyaṃtare ākāśadhāty evam eva kāśyapa
śrāvakasyābhisamskṛtam jñānam draṣṭavya / tatredam ucyate // ghuṇakhādītasyaiva hi sarśapasya ākāśam
abhyaṃtarito parikṛtam / abhisamskṛtam jñāna tathā vijānatha yaṃ śrāvakasya laghukam parikṛtam //
<§79> tad yathāpi nāma kāśyapa daśāsu dikṣv ākāśadhātur evaṃ bodhisatvasyābhisamskṛtam jñānam
draṣṭavyam / tatredam ucyate // yathāpi ākāśa daśādīśasu anāvṛtam tiṣṭhati sarvaloke / abhisamskṛtam

paśyatha bodhisatve jñānaṃ tathā sarvajagatpradhāna // (KP§§76-79, 114,1ff.)¹¹

< § 76> カーシャパよ、以下の通りである。例えば、四大海が新鮮なバターによって満たされているごとくに。菩薩の善根は形成されると考えられる。このことについて次のように[偈頌が]説かれる。例えば、四大海が新鮮なバターによって満たされ、清浄ですべてにわたって快い状態である。かくのごとく善逝の子である菩薩の善は、善なる流れによって常に満たされると考えられる。

< § 77> カーシャパよ、以下の通りである。例えば、とある人の一本の毛髪の百分に割かれた先端によって、四大海から一滴の水をすくいとったそのごとく、カーシャパよ、声聞の善根は形成されると考えられる。それについて以下のように言われる。例えば、かの水の集まりから、毛髪を百分した先端によって滴をすくいとったそのごとくに、とくに諸声聞によって善がなされるのであり、[そうした]諸々の善と結びついているのだと考えるべきである。

< § 78> さらにまた、カーシャパよ、例えば、虫に食われた芥子粒の内にある空間、他ならぬこのようにカーシャパよ、声聞の形成された智慧は理解されるべきである。このことについて以下のように言われる。他ならぬ虫に食われた芥子粒の内側にわずかな空間がある。同様に声聞の形成された智とは、些細なもの、わずかなものであると知られるべきである。

< § 79> さらにまた、カーシャパよ、十方における虚空界、このように菩薩の形成された智慧は理解されるべきである。このことについて以下のように言われる。すなわち全世界において虚空は十方に開かれている。同様に菩薩における形成された智は、全世界のうちの主要なものとして見られるべきである。

『大宝積経』に見られる喩えは、『莊嚴経論釈』で引用される箇所と若干の異同がある。もっとも大きく異なる点が、菩薩の善根が大海を満たす新鮮なバターに喩えられている点である。引用された部分では、四方の大海の水のごとくとなっており、声聞のわずかな水量との比較であったが、実際の『大宝積経』においては単純な容量の比較とはいえない。ではどうしてこの箇所が『莊嚴経論釈』に引用されるのか。引用されるにもかかわらず、その理由が述べられないのか。単調な引用文になっているが、どのような意図があるのかといった疑問を解決する方策の一つとして、スティ

11 サンسكريット原典には欠損部分が存在するため、文意を補完するために同箇所のチベット語訳も以下に付す。
 *<§76>'od srung 'di lta ste dper na/ rgya mtsho chen po bzhi mar sar (P.: ser) gyis yongs su (P.8) gang bar gyur pa bzhin du/ byang chub sems dpa'i dge ba'i rtsa ba mngon par 'dus byas pa blta bar bya'o // de la 'di skad ces bya ste //dper na rgya mtsho bzhi po mar sar gyis/yongs gang gtsang zhing kun (P.:118b1) nas yid du 'ong//de bzhin byang chub sems dpa' bde gshegs sras//dge ba'i klung gis rtag tu gang bar blta // <§77>'od srung 'di lta ste dper na / mi la la zhis gis skra tshal pa brgyar gshags pa'i rtse (P.2) mos/ rgya mtsho chen po bzhi las chu thigs pa gcig blangs pa de bzhin du / 'od srung nyan thos kyi dge ba'i rtsa ba mngon par 'dus byas pa blta bar bya'o// de la 'di skad ces bya ste / *dper na chu'i phung po de las ni // skra tshal brgya'i rtse mos thigs blangs pa // de bzhin nyan thos nams kyi dge byas pa'i // dge ba dag dang ldan par lta bar bya // *<§78>'od srung 'di lta ste dper na / yungs 'bru stin bus zos pa'i nang gi nam mkha' bzhin du // nyan thos kyi 'dus ma byas shes pa blta bar bya'o // de la 'di skad ces bya ste // dper na yungs 'bru sring bus zos pa'i // nang gi nam mkha' de ni chung ba yin // nyan thos (P.5) 'dus ma byas pa shes pa yang // de bzhin chung zhing shin tu chung bar blta // <§79> 'od srung 'di lta ste dper na / phyogs bcu'i nam mkha'i khams bzhin du / byang chub sems dpa'i 'dus ma byas (P.: 'du byas) shes (P.6) pa blta bar bya'o // de la 'di skad ces bya ste // dper na phyogs bcu'i 'jig rten thams cad na // nam mkha'i khams ni sgrub pa med par 'dug / byang chun sems dpa'i ye shes 'dus ma byas shes pa // 'gro ba kun (P.7) gyi (P.: kyi) mchog kyang de ltar blta'o // (KP (P).118a7-118b7)

ラマティ作とされる註釈群に注目した。例えば、スティラマティに帰せられる『大宝積経』の註釈『大宝積経論』には、この新鮮なバターに喩えられる理由を解説されている。

chu'i thigs pa dang mar sar gyi dpe gnyis kyis ni dkar po'i chos yang dag par sgrub par byed pa'i khyad par bstan te / nyan thos ni bdag skyed pas dkar po'i chos rnams chung ngo // byang chub sems dpa'i ni tshad med de / sems can thams cad la phan pa dang / bde bskyed de / dper na pha mas mar sar gyis rang gi bu rnams skyed pa de bzhin du byang chub sems dpa' yang mar sar lta bu'i rang gi dge ba'i rtsa ba dpag tu med pas byang chub sems dpa' las dang po pa lta bu rnams skyed do //yungs 'bru dang nam mkha' dpe gnyis kyis ni / ye shes yang dag par (D237b1) sgrub pa'i khyad par ston to // nyan thos ni 'dus ma byas pa'i ye shes kyis nyon mongs pa rnams kyis bdag gsog dang gsob tu byed do // byang chub sems dpa' ni phyogs bcu'i sems can thams cad la snying brtse bas mngon par rtogs pa'i ye shes kyi byang chub kyi phyir yongs su bsngo'o // (KP (t) D.237a)

水滴とバターの二種の喩によって、白法を集成することに優れていることが説かれる。声聞は、自己が成長するので諸々の白法が少ないのである。菩薩の[白法]は無量である。すべての衆生に対する利益と善を生じさせる。例えば、父親と母親によってバターを用いて自分たちの息子たちを成育するのごとくに、菩薩もまたバターのごとき自己の無量の善根によって、初学の菩薩といった息子たちを成育するのである。芥子粒と虚空の二種の喩によって、智慧の集成についての優れていることが説かれた。声聞は無為なる智によって、諸煩惱による自己や些少なものとやわずかなものをなすのである。菩薩は十方の一切衆生に対する憐憫によって、現観正等覺菩提のゆえに廻向するのである。

このように、声聞と菩薩の違いは白法(=善なる行為)の量的差異でもあるが、菩薩の白法が新鮮なバターのごとくであると喩えられるのは、菩薩が父母のような存在であり、救済されるべき初学の菩薩といった息子達を成育するためであると『大宝積経論』中では理解されている。この理解は、『大宝積経論』の解説のうち、広説に含められるものである。『大宝積経論』の解説は略説と広説に分かれており、このうち広説とは、『瑜伽師地論』「撰決択分」を介して理解される内容であり、瑜伽行唯識学派で特に重要視される經典に準じる典籍の一つである。このことから、スティラマティによる解説を総合してみると、『莊嚴經論釈』にみられる『大宝積経』の二資糧に対し、初学者のために便宜を測るために平易な喩例が引用されていることが推察される。特に『大宝積経』を引用するのは『瑜伽師地論』「撰決択分」にも見られる瑜伽行唯識学派の典籍での解説にも通じており、基本的な教説として理解されるべきものと位置付けられているといえるのではないだろうか¹²。『莊嚴

12 大竹 [2008 : 482]にある通り、『瑜伽師地論』「撰決択分」中の記述は、声聞の白法が小さく、菩薩の白法が無量であるという量的差異のみの言及であるから、SAVBhでは、『瑜伽師地論』「撰決択分」の言及を支持しているようにも見える。

nyan thos ni bdag nyid kyi bde ba yang dag par ,phel bar byed pa (P.128b2) dkar po'i chos chung ngu dag dang ldan pa yin gyi / byang chub sems dpa' ni sems can thams cad kyi bde ba yang dag par ,phel bar byed pa dkar po'i chos tshad med pa dang ldan (D.114b5) pa yin no //

「声聞は、自己の利益を増長するのであり、白法が劣っていることと結びついているのであって、菩薩は衆生の利益を増長するのであり、白法が無量であることと結びついているのである。」

経論釈』では、この新鮮なバターの表現は存在しないが、少なくとも声聞と菩薩の違いを福德と智慧の二資糧の量的な差異であるとし、その理解を助けるために『大宝積経』からの引用であると明示していると結論づけられる。当時の菩薩における学修過程において、『莊嚴経論釈』と同時に『大宝積経論』も学習されていたことは容易に想定され、『莊嚴経論釈』の資糧は大乗経典およびそれに準じる典籍類を基礎として理解されるべきものとして順次学習されていたテキストであった可能性もあるといえよう。

5. 結論

スティラマティは、『莊嚴経論釈』内で経典からの文言を多用するにもかかわらず、どのような意図をもって文言の引用を付すのかは解説していない。管見の限りで、声聞・独覚よりも菩薩が優れていることを強調するために、根拠として大乗経典の文言を引用する傾向がある。

『莊嚴経論釈』第十八章「菩提分品」内で見られる経典からの文言は、主に『大方大集経』「無尽意品」からの文言が多数を占めるが、『大宝積経』を引用元とするケースが資糧の徳目の解説のみにみられる。一見すると『大宝積経』からの文言引用は特異にみえるが、『大方大集経』「無尽意品」と『大宝積経』ともに、大乗経典として『莊嚴経論釈』より以前に成立しており、各々ヴァスバンドゥとスティラマティに帰せられる註釈が存在することから、瑜伽行唯識学派において重要視されていた可能性が高い諸経典である。同時に諸経典註釈の成立もまた、『莊嚴経論釈』以前に成立した可能性が高いため、『大宝積経論』が『莊嚴経論釈』以前に成立し、同時に学習過程としても、スティラマティの注釈である『大宝積経論』を学習した後『莊嚴経論釈』を学習した可能性が高い。現在の研究情勢を鑑みたくて、『莊嚴経論釈』において『大宝積経』の文言が引用される背後に、スティラマティに帰せられる『大宝積経論』の解説も十分に理解して、資糧の徳目を理解すべきであるという考えが意図されているのではないだろうか。また、『大方大集経』「無尽意品」からではなく、『大宝積経』からの文言が引用されたのは、『瑜伽師地論』「撰決択分」などにもみられるような瑜伽行唯識学派の資糧理解を踏襲しようとする姿勢にも通じるものである。従って、『莊嚴経論釈』作者であるスティラマティが大乗経典の文言の引用する際に、引用すべき文言を取捨選択していたと考えられ、瑜伽行唯識学派としての特色が注釈書に表現されていた可能性が示唆されるのである。

参考文献

- KP Kāśyapaparivartaka, M.I. Vorobyova-Desyatovskaya ed., *The Kāśyapaparivartaka*, Tokyo, 2002.
- KP (t) Kāśyapaparivartakaṭīkā, Baron A. von Staël-Holstein ed., *A Commentary to the Kāśyapaparivartaka*, Peking, 1933.
- MSABh: Mahāyānasūtrāṃkārabhāṣya. Levi, Sylvain ed., *Mahāyānasūtrāṃkāra-Exposé de la Doctrine du Grand Véhicule selon le Système Yogācāra*. Tome I; Texte, Paris, 1907.
- SAVBh: Sthiramati, *Sūtrāṃkāravṛttibhāṣya*. D No.4034 (Mi-Tsi), P No.5531 (Mi-Tsi).
- SŚ Sikṣasamuccaya, Compiled by Śāntideva, edited by Cecil Bendall, *Bibliotheca Buddhica* 1 1902.
- Braarvig [1993] Jens Braarvig, “*Akṣayamatīrdeśasūtra*” *Tome II, Oslo*.
- 大竹晋 [2008] 『新国訳大蔵経 大宝積経論』大蔵出版.
- 岡田・岸 [2008] 岡田憲尚・岸 清香「Mahāyānasūtrāṃkāra 18章注釈書の引用文献(II)」『宗教学・比較思想学論集』筑波大学宗教学・比較思想学研究会 第9号
- 高崎直道 [2009] 『如来蔵思想の形成 II 高崎直道著作集第五卷』春秋社
- 能仁正顕他編 [2013] 『『大乘莊嚴經論』第17章の和訳と注解－供養・師事・無量とくに悲無量(龍谷大学仏教文化研究叢書 30)』自照社出版.